

◇ 8月の天文暦 ◇

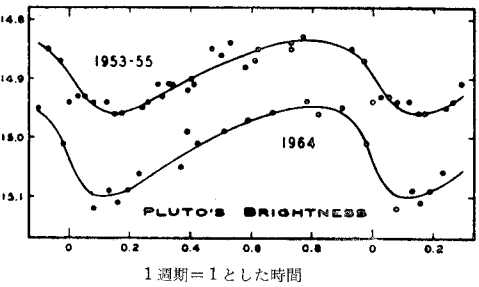
日時	記	事
2 0	ジュノー 衝	
4 15	上弦	
7~15	ペルセウス座流星群	
7 2	パラス 衝	
8 3	立秋 (太陽黄経 135°)	
11 5	月 最遠	
12 17	望	
14 19	土星 月の 3° 北	
16 4	水星 内合	
20 13	下弦	
22 16	木星 月の 2° 南	
23 18	処暑 (太陽黄経 150°)	
26 4	月 最近	
27 4	朔	

冥王星の自転周期

太陽系の一番外側をまわっている冥王星についてはわからないことが多い。1930年トンボーにより発見されて以来35年もたっているのに、質量とか半径とかいった基本的な値すらはっきりしていない。質量の方は1931年にニコルソンとメイヨールが海王星の運動から(1.0±0.2)M<sub>⊕</sub>、さらに1940年にワイリーが(1.0±0.1)M<sub>⊕</sub>と求めており、半径の方は1950年にカイパーとヒューマソンがパロマーの200インチを使って0°.23±0%.01と測定、実半径を2900kmと算出している。しかしこれが本当だとすると、密度が50g/cm<sup>3</sup>にもなり、常識をはずれているから、これらの値は信用できない。

東京における日出入および南中 (中央標準時)

VIII月	夜明		日出	方位	南中	高度	日入		日暮
	時分	時分	時分	時分	時分	時分	時分	時分	時分
1	4 11	4 48	+23.8	11 47	72.9	18 46	19 23		
11	4 21	4 56	+19.5	11 46	69.5	18 36	19 11		
21	4 30	5 4	+15.6	11 44	66.4	18 24	18 57		
31	4 39	5 12	+11.2	11 41	63.0	18 11	18 43		



冥王星の光度曲線。1953~55と1964の上下のいずれは測定基準の不確定さによるもので意味があるわけではない。

冥王星の光度変化

ところが自転周期の方は火星についてよく求まっている惑星になりそうである。1953~55年にウォーカーとハーデーはローウェル天文台の42インチ反射鏡を使って、冥王星が変光することを発見、これが自転によるものとして自転周期を6.<sup>d</sup>390±0.<sup>d</sup>003と見積った。しかし、なにぶん15等という暗さのためあまり精度がよいといえなかったので、ハーデー(ドミニオン天文台)が最近(1964年)測りなおしをした。今後ダイア天文台の24インチを使い、光度測光で変光周期6.<sup>d</sup>38673±0.00030=6.<sup>d</sup>9<sup>m</sup>16<sup>s</sup>54±26<sup>s</sup>をつぎとめたが、自転軸の方向が不明なので自転周期としてはさらに±45°の不確定さが残る。10年前より望遠鏡の大きさは小さいが、エレクトロニクスの進歩により精度はあがっていると考えられるから、自転周期に関するかぎり冥王星は一人前といつてよからう。(⊕)

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日出, 右側は日入対す値)

分	分	分	分	分	分
鹿児島 +43	+32	鳥取 +23	+22	仙台 -8	0
福岡 +41	+35	大阪 +19	+16	青森 -12	+5
広島 +31	+28	名古屋 +12	+11	札幌 -18	+6
高知 +28	+22	新潟 0	+7	根室 -36	-10

